平成三十年度

「モラル・エッセイ」コンテスト

優秀作品集

福島県教育委員会

ふくしまから
はじめよう。
Future From Fukushima.

平成三十年度　道徳教育総合支援事業

「モラル・エッセイ」コンテスト優秀作品

【　中学生の部　】

最優秀賞	「たくさんの人々が伸び伸びと共存する世の中へ」	南会津町立荒海中学校	三年	星　優妃	さん
優秀賞	「思いやり・協力」	郡山市立小原田中学校	二年	郡司　百華	さん
優秀賞	「同級生から学んだこと」	相馬市立中村第一中学校	三年	佐藤　凜子	さん

【　高校生の部　】

最優秀賞	「命輝かせて」	白河高等学校	一年	加藤　慶大	さん
優秀賞	「手紙」	白河高等学校	一年	奥山　凛	さん
優秀賞	「千年の想い」	相馬東高等学校	一年	西内　遥菜	さん

【　一般の部　】

最優秀賞	「弁当の思い出」	福島市在住		中山　輝雄	さん
優秀賞	「感謝」	中島村在住		櫻下　茂男	さん
優秀賞	「二年後にもらった手紙」	福島市在住		猪股　淳行	さん

たくさんの人々が伸び伸びと共存する世の中へ

南会津町立荒海中学校
三年　星　優妃

私は、ある温泉施設へ行った時に一人のおばあさんに出会った。そのおばあさんは、浴槽のわきで自分のタオルを洗っているところだった。タオルを洗うこと自体はよいのだが、その洗った水が浴槽にこぼれてきているのに、全く気にしないで洗い続けるおばあさんを見ているのは正直、よい気持ちではなかった。

すると突然、そのおばあさんが話しかけてきた。

「どこから来たの。」

私は驚いた。まさか、話しかけられるとは。

「私達、田島の方から来たんです。」

そう私の祖母が答えると、目も合わせずに、

「そう。私は何回もここに来てるんだ。」

と話を続けてくれた。そのおばあさんは目が見えないと言う。その話を聞いてさっきまでのことがすべて納得できた。タオルを洗っていた時のことも目が合わないことも。そこで私が気付いたことは、人は見た目だけでどんな人なのか、何を必要としているのか分からないということだ。

この世の中には、目や耳が不自由な人、身体の一部が思うように動かなかったり無かったりする人がたくさんいる。また、妊婦さんや病気を持っている人もいる。私はたまに考えることがある。もし私がそういう人に会ってその人が困っている時、迷わず手を差し延べてあげられるだろうか。その人が本当は苦しいのに強がっていたら、その苦しみに気付いてあげることはできるだろうか。私はそういう時、周りの人が見て見ぬふりをしていても笑顔で声をかけられるような人になりたいと思っている。その人に代わってあげることはできなくても苦しい気持ちを減らしてあげたい。そしてどんな人でも伸び伸びと生きることができる世の中になってほしいと思っている。そのために、私達は自分とは少し違う個性を持っている人達を知ることが必要だと思う。身体が不自由な人や、たくさんある病気について知識を増やしてみませんか。

思いやり・協力

郡山市立小原田中学校
二年　郡司　百華

みなさんは、視覚障害者誘導用ブロックを知っていますか。道でよく見かける黄色い凹凸のあるブロックのことです。私はこのブロックについて、今まで視覚障害者の視点から考えたことはありませんでした。しかし、ある出来事で興味を持つようになりました。

それは、一年前のことです。私はボランティア活動で駅前に来ていました。その時、私は「どうしたのだろう。」と思いました。それは、おじさんがフラフラしながら視覚障害者誘導用ブロックを杖で触っていたからです。母は、それをみておじいさんに「どこに行きたいのですか。」と聞きました。おじいさんは「駅まで行きたいです。」と答えました。すると、ボランティア活動に来ていたおじさん達が「あっちですよ。」と案内をしていました。

それをみた私は、心が温かくなりました。それと同時に、ブロックだけではできることが限られているのではと思いました。

私は、このような体験をしてから視覚障害者のことに興味を持ちました。そして、様々な視覚障害者のための物を調べることにしました。音声アプリや、点字、押すだけで調味料を量れる用具などがありました。さらに調べてみると、他にも、目の見えにくい人のための文字が大きくなるサイトも見つけました。このように様々な工夫がされていることがわかりました。

しかし、今は技術が発達してきていても、それだけではできないことがあると思います。そのような時に必要なのが「思いやり」です。できることは限られるけれど「思いやり」で手を差し延べれば、できることの範囲は広まると私は考えます。

このことから、私は技術だけではできることが限られていると思いました。障害者に気づいてすぐに手を差し延べた母やボランティアの方々はすばらしいと思います。私も思いやりをもった大人になりたいです。そうすれば様々な人を助けられると思います。思いやりを持った大人になれるよう頑張ります。

同級生から学んだこと

相馬市立中村第一中学校
三年　佐藤　凜子

私の同級生にとても優しい男の子がいます。その男の子との出会いは小学四年生の時でした。私は転校生として男の子と同じ小学校に通うことになりました。学校に慣れるまで緊張の日々を過ごす中、学校帰りにその男の子が、

「バイバイ。」

と声を掛けてくれました。私はうれしかったのに、なんだかはずかしくて、「バイバイ」と言えたのか記憶がありません。ただ何気ない「バイバイ」が、自分がクラスメイトとして認めてもらえたようですごくうれしくて、学校にも慣れ、転校してきたことも忘れるくらい楽しく学校生活を送れました。

その男の子は中学校に進学しても、道で困っている人を助けるので、よく学校にお礼の電話が来ます。ある時、私は、その男の子が、赤信号の交差点の中を歩くおばあさんを助ける姿を目にしました。おばあさんは歩く速度が遅く、赤信号になっても、まだ信号の真ん中を歩いています。その男の子は歩道に自転車を止めて、おばあさんの元に走り、おばあさんの手をとり、道まで送り届けていました。きちんと車にも頭を下げて、私は車の中からその様子を見ていました。私が近くにいて同じ行動ができるのか考えた時、私にはその勇気があるのかと考えてしまいます。でも、男の子の行動を見ていると、勇気などという気持ちは感じられず、自然な行動で、人を助けることに勇気が必要な私との行動力の差はそういう所だと思います。私はいつもその男の子みたいになりたいと思っています。男の子のようにさっそうと助ける事がすぐにはできないかもしれませんが、信号をわたる時、おばあさんを助けた男の子だけではなく、おばあさんが渡り切るまで、クラクションを鳴らすことなく見守り続けた運転手さんの優しい気持ちにも学びたいと思います。たった一人の優しい行動で、そこにいたすべての人が優しい気持ちになれることを、男の子の行動によって学びました。

命輝かせて

福島県立白河高等学校
一年　加藤　慶大

ハリーポッターの物語を読むたびに、僕は主人公のハリーではなく、親友のロンに共感していた。親友のハリーや、五人の兄たちにコンプレックスをもつロンの姿が、自分と重なって見えたからだ。中学校の部活のバスケットボールは、小学校からミニバスで頑張ってきた友人たちのようにうまくできなかった。三人の兄たちは、地元の国立大学を卒業し、役所や学校で働いている。兄たちのようにできて当たり前、できなければ、僕だけがバカを証明することになる・・・いつもそう感じていた。

八十三歳の祖母は、現役の美容師だった。過去形なのは、昨年の十一月に突然の病で倒れてしまったからだ。S字結腸に穴があき、一命はとり止めたものの、人工肛門になってしまった。しかし、祖母はストマ交換などの練習に努め、年末には退院することができた。その祖母を、二度目の病が襲う。今度はクモ膜下出血だった。その緊急手術からも生還した祖母は、この夏人工肛門から普通の体に戻す手術も受けた。一年もたたないうちに、三度目の手術だ。体重は、四十キロを切った。けれども、祖母はあきらめない。今も、懸命にリハビリに努めながら生活している。

祖母を支えているのは、「もう一度お客様の髪を整えたい」という想いだ。七十年近い美容師としての生活の中で、お客様と強い信頼関係を築いてきたのだ。東日本大震災の時にも、ハサミとくし一本で髪を切り、話を聞く祖母の姿に、手に職をもつことの強みを見せつけられた思いがした。そんな仕事に出会えた祖母を、僕は羨ましく思うし、誇りにも思う。

祖母の姿を見て、僕は友人や兄たちを羨んでいる自分を、恥ずかしく思った。ライバルは他人ではなく、自分自身だと思ったのだ。どんなに年をとっても、どんなに苦しい状況になっても、自分自身と戦い、精一杯自分の命を輝かせていくことが、人としての使命なのではないかと思った。祖母に負けないように、自分の道を求めて、頑張っていきたい。

手紙

福島県立白河高等学校
一年　奥山　凛

人との出会いは一期一会だと思う。そう心から思えるのは、一人の先生のおかげだ。そしてその出会いは、今だからこそ、尊いものだと思えるのだ。

中学三年の冬。そう誰もが嫌な時期だったであろう、受験シーズンだ。その時私は本気でどの高校を受験するか迷っていた。自信はないけれど、将来のためを思い進学校に挑戦するか、それとも確実性を取るか。受験校を変更できる日のぎりぎりまであんなに迷ったのはきっと私ぐらいだ。それくらい悩んだ。一生分悩んだかもしれない。担任の先生や親や友達など、たくさんの人を巻きこんで決めた結論は「挑戦」だった。私は今までの人生で挑戦から逃げてきた。今回こそはと、進学校への挑戦を決めたのだ。挑戦している時、私は何度も諦めそうになった。その時、私はある手紙を読んだ。かわいらしい紙にかわいらしい字ですてきな言葉が並べてある一通の手紙。差出人は、小学校の時の先生だ。

私はその先生の名前を見てなつかしく思った。その先生は、私がつらい時、不安で前を向けない時、いつもそばで支えてくれた私のとても大切な人だ。やさしく温かい先生の言葉に私はいつも助けられてきた。

気づいたら私は、先生に手紙を書き始めていた。小学校の頃の感謝と受験の不安のことを。私は返事を待っている間、どこかもどかしい気持ちでいっぱいだった。そして、私は先生からの返事を読んで思わず涙がこぼれ落ちた。それと同時に心が温かくなった。「あなたはまっすぐな子、努力ができる、ずっと応援している」こんな風に応援してくれる、それが私の大好きな先生だ。そのおかげで私は前を向けて一心にがんばることができた。そして、高校に合格することができたのだ。

先生があの時書いてくれた一つ一つの温かい言葉が、これからの私をずっと支えてくれる。そして私は今日も出会いを大切にする。全ては出会いから始まるのだから。

千年の想い

福島県立相馬東高等学校
一年　西内　遥菜

私達の住むこの地域には、一千余年代々受け継がれてきた国の重要無形文化財である相馬野馬追という伝統行事がある。東日本大震災が起きた二〇一一年の出場騎馬数は僅か八十二騎。来場者数も三万七千人と、例年の六分の一程度であった。東日本大震災から八年の今年、長年受け継がれてきたこの相馬野馬追にある強い想いを持ち、私は出陣することを決めた。

今から約三年前、私の祖父が亡くなった。祖父は相馬野馬追が大好きで、若い頃から出陣していた。私にとって祖父は厳しく怖い存在だったが、野馬追の日の騎馬武者姿は格好良く誇らしかった。そんな祖父の姿を父が受け継いだ。代々受け継がれてきた三日月の旗指物を背中に指し、甲冑を身に付け、堂々と街中を進軍する姿を目にし、祖父が他界してしまった年は、とても胸があつくなった。それと同時に私もこの伝統ある行事に参加して人を感動させたいと思うようになった。

相馬野馬追に出場すると決めてから、祭りまでの一年間は長いようで短かった。行列といっても、馬丁はつけないため、一人で馬を操れるようにならなければならない。祖父・父が行っていた厩舎で朝三時に起き、練習をしてから学校に行くというとてもハードな日々を過ごしていた。時には辛い事や嫌な時もあったが、厩舎の人達の支えなどがあり、頑張ることができた。中三の冬からは乗馬クラブにも通うようになり、本気で馬術も始めた。

いよいよ本番当日。祖父の身に付けていた陣羽織。甲冑に三日月の旗指物。大勢の観客が見守る中、祖父と出陣している気持ちになった。初陣して無事に帰ってくることができ、周りの人達からは「感動した」などの言葉を沢山頂いた。同時に大きな達成感を抱いた。家族や仲間の支えや助けがあり、出陣できたことにとても感動している。

来年の野馬追に向けた練習が始まっている。野馬追と祖父を想い続けるために。

一般の部最優秀作品

弁当の思い出

福島市在住
中山　輝雄

弁当の話になると、いつも子どもの頃を思いだします。それは小学二年生の春でした。戦争が終わって数年後のことです。

四月も終わりに近いある日、担任の結城先生は僕たちを近くの神社に、花見に連れていってくれました。クラスには四十名を超える子ども達がいました。満開の桜の下で鬼ごっこやかくれんぼをした後、弁当の時間になりました。みんな思い思いの場所で、好きなお友達と一緒に弁当を広げ始めました。

その時です・・・。

「あっ、しまった。弁当、忘れてきたあ。」

と僕は叫んでしまったのです。僕はどうすればよいのかわからず、桜の根もとで友達が弁当を食べるのを、そっと見ていました。すると、そんな僕に気づいたのか、先生は僕の隣りに座りました。そして、やおら自分の弁当を広げると、その蓋を僕によこしました。先生の弁当は深みのあるドカベンでした。その弁当の真ん中に、サンマが一匹、どんと横たわっていました。先生はサンマをご飯ごと、箸で、真二つに切り分け、頭の方の半分を私が持っている弁当の蓋にのせてくれたのです。僕は早速、サンマの頭の方からかぶりつきました。ほろ苦い味がしました。風が吹いて、桜吹雪が弁当の中へ入ってきたので、それも一緒に食べました。サンマがまるでヤマメのように輝いていました。ふと、先生をはさんで、左隣を見ると、サッちゃんも先生の弁当半分を食べているではありませんか。僕の他にももう一人、弁当を忘れてきた人がいたのでした。先生は僕たち二人の間で、ただニコニコ見ているだけでした。

それから、何年か後、私はこの弁当の思い出をきっかけに小学校の教員になったのです。

今でも、あの時の情景を思いだすたびに涙があふれて止まりません。恩師、結城正子先生は、おさげ髪の、新卒の先生でした。

感謝

西白河郡中島村在住
櫻下　茂男

「ただいま」

今まで意識して言ったことがあっただろうか。玄関のドアを開けると何だか懐かしい感じがして、「おかえりなさい」と子供達が嬉しそうに迎えてくれたのを忘れることができません。

二〇一六年をもって、当時勤めていた工場の閉鎖に伴い、単身赴任で転勤することになりました。

毎月帰省する度にわかるのが子供の成長です。父親がそばにいないと子供に悪影響が生じると少し思っていました。転勤後の一ヶ月は、実家、私生活、仕事のことと色々と大変でした。初めて帰省した時、小学生の娘が台所に立って、妻と一緒に料理や洗い物をしていました。私がいた時には全くしなかったことです。誰に言われた訳でもない、自然と周りに気を配り、気を遣うことが出来ている姿に感動しました。寂しい思いはさせますが、しっかりと大きく、他人のことを考え、思い、行動するようになっていることに気付きました。違った角度で見て、考える事ができ、私にとっても家族にとっても大きく成長出来ていると思いました。このことをきっかけに、私自身も色々と考えるようになりました。働ける有難味、帰れる場所がある大切さ、当たり前のことを当たり前に自分が出来ていなかったことなど。特に妻には感謝しきれません。自分で食事、洗濯、掃除、買い物をしてみて大変さがものすごくわかりました。妻には仕事をしながらよくやってくれていたと感謝の念でいっぱいになりました。小さな気付きからこんなにも深く考え、感謝の気持ちが生まれたのは初めてかもしれません。

私は誰かのために頑張れること、感謝されることが絶対その人と周りを成長させてくれると信じるようになりました。自然体で感謝し、感謝される人になれるよう頑張りたいと思います。

妻へ「ありがとう。そして、これからも宜しくお願いします。」

二年後にもらった手紙

福島市在住
猪股　淳行

息子から中学校卒業記念に手紙をもらいました。生徒全員が家族に宛てて書くものです。パラっと開くと、文章を書くのが得意ではない彼らしく、便せん一枚半をやっと埋めたという感じの文字が控えめに並んでいました。妻と私それぞれに、中学生活で最もありがたかったことについて感謝の気持ちが述べられています。私に対してはこんなことを書いていました。

「父さんは私が一年生のとき、問題を起こしたときに消防団の訓練に参加させるなど正しい道に戻そうとしてくれました。」

思い起こせば、教室の鉢植えに墨汁をかけたとか（それで黒い実がなると思ったらしい）、友達のシャープペンシルを壊したとか（分解して仕組みを調べたかったらしい。自分の物でやれ！）、その度に担任の先生から私のところに電話がかかってきました。

ある時また電話があり、今度は何をやったのかとため息の出る思いで先生の話を聞くと、ライターをおもちゃにして持ち歩いていたということでした。

電話の内容を聞いた後、その日は消防団の集まりがあったので屯所へ出かけると、同じ敷地にある神社の境内で、息子は友人数人と談笑していました。私は彼を友達から引き離して、屯所へ連れ込みました。

「俺たちが町を火から守っているのに、お前は何をやっているんだ！」

折しもその日は規律訓練だったので、そのまま訓練に参加させることにしました。ありがたかったのは、分団の仲間たちが息子を冷やかさなかったことです。皆がいつもどおり真剣に取り組みました。そのことがあってから、息子は火に対する好奇心を失いました。単に怒られたからというのではなく、懸命に取り組んでいる大人たちがいることをわかってくれたのだなということを二年後にもらった手紙からうかがい知ることができました。